

《原著論文》

同性親友に対する自己開示におよぼす 交際期間の長さの影響

Effects of the Length of Friendship on Self-Disclosure with the Same-Sex Close Friend

諸井克英 岩佐直美* 植木美枝**
(Katsuhide MOROI) (Naomi IWASA) (Yoshie UEKI)

Abstract : The present study examined the effects of the length of friendship on self-disclosure with a same-sex close friend. Perceptions-of-Risk-in-Intimacy Scale (Pilkington & Richardson, 1988) and Self-Disclosure-with-the-Same-Sex-Close-Friend Scale (developed by the authors, revising scale items used by Tagawa *et al.* (2006)) were administered to female undergraduates ($N = 330$). The result of principal component analysis (with promax rotations) of Self-Disclosure Scale identified 11 salient aspects of self-disclosure with the same-sex close friend. The results of ANOVAs and correlational analyses indicated that perceptions of risk in intimacy inhibited self-disclosure in the short term stage. The significance of the research in the close relationships process (Levinger, 1974) was discussed.

Key words : self-disclosure, friendship, close friend, perceptions-of-risk-in-intimacy

I. 問題

Levinger (1974) は、二者の関係進展に関する次の基本的図式を提起した。①二者が何の接触もない段階（無接触）、②一方が他方の存在を認め、相互作用がなくても相手に対する一方向的な態度・印象が生じる段階（覚知）、③若干の相互作用によって相手に対する何らかの態度が生じる段階（表面的接触）、④二者間で交わされるコミュニケーションによって二者が親密する段階（相互性）。Levinger のモデルによれば、関係親密化にとって自己開示が重要となる。Jourard (1971) は、臨床実践の中から人々の心理学的健康にとって自己開示が鍵となることを見出し、自己開示を「自分自身をあらわにする行為であり、他人たちが知覚しうるよう自身を示す行為」と定義した。双方の自己開示の反復によって相互理

解が促進され、二者間に親密な絆が生じる。

表面的接触段階から相互性段階へと進展するために、二者間で営まれる開示の内容も、開示者にとって表面的なものから内面的なものへと変化＝発展するはずである。例えば、榎本 (1997) は、自己開示相手が親密であるほど自己開示しやすくなることを示した（「知りあったばかり」、「顔見知り程度」、「とくに親しい」）。このことを次のように仮説化した。

仮説 I : 二者関係が開始されて時間が経過するほど、内面的内容に関する自己開示が活発に行われる。

ところで、Bellak (1970) は、現代人の対人関係を「山アラシのジレンマ」と特徴づけた。つまり、相互に「傷つけられたくない」あるいは「傷つけたくない」という形で、自分と相手との間の心理的距離の適度な調節を図り、結局は、Levinger (1974) が示した関係の進展を抑制することになる。藤井 (2001) は、この「山アラシのジレンマ」を測定する尺度を開発した。この尺度を大学生に実施し、因子分析によって「近づきたい-近づ

同志社女子大学生生活科学部

*同志社女子大学生生活科学部 2008 年度卒業生

**同志社女子大学現代社会学部 2007 年度卒業生

きたくない」と「離れたい-離れすぎたくない」の対人上の葛藤それぞれに自分自身の被害回避と相手に対する加害回避の2側面が存在することを認めた。

この Bellak の指摘は、二者関係が親密化方向に必ず進展するとは限らず、この進展を抑制する個人的傾性が存在することを示唆している。本研究では、対人関係の親密化を抑制させる個人的傾性として、Pilkington & Richardson (1988) が概念化した「親密さにおけるリスク知覚」(Perceptions of risk in intimacy) を取りあげる。Pilkington & Richardson は、親密さと結びついたリスク知覚における個人差を測る尺度を作成し、親密な関係に高水準のリスクを知覚する者には、①親友数が少ない、②自己主張的でない、③他者への信頼性が低いなどの特徴が認められることを見いだした。

この親密さリスク知覚と自己開示との関係について、次の一連の仮説を設定した。Pilkington & Richardson (1988) の考えに従えば、親密さリスク知覚は、日常のつきあいでの自己開示を抑制するはずである。

仮説Ⅱ-a：親密さリスクを強く知覚している者は、他者に対する自己開示をあまり行わない。

親密さリスク知覚の概念を拡張すると、開示内容の水準によって、仮説Ⅱ-a は限定される。

仮説Ⅱ-b：親密さリスクを強く知覚している者は、肉面的開示を回避する傾向がある。

さらに、二者関係の時間的経過に注目すると、交際期間が長くなれば、個人的傾性として抱かれた親密さリスク知覚があまり機能しないと思われる。長期段階になると関係の親密さがそれなりに安定化し、関係進展のための自己開示の効用がなくなるからである。

仮説Ⅱ-c：親密さリスク知覚と自己開示との負の関係は、二者関係が開始されて時間が長く経過すると、消失する。

これらの仮説を検証するために、女子大学生を対象とする質問紙調査を行った。回答者に「最も親しい同性の友だち」を同定させ、その人物に対する自己開示の様相を交際期間の長さや親密さリスク知覚と関連させ検討した。一般的に男性よりも女性のほうが自己開示傾向が強いので (Derlega, Metts, Petronio, and Margulis, 1993; 榎本, 1997 参照)、本研究では女性を対象とした。

Ⅱ. 方法

調査の対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用し

て、2年度にわたり質問紙調査を実施した(2007年6月15日・25日;2008年4月28日;回答者は重複していない)。回答時には匿名性を保証し、質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。

青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き、後述する2尺度にそれぞれ完全回答した女子学生330名(2007年度分191名;2008年度分139名)を分析対象とした(1年次80名,2年次165名,3年次78名,4年次7名)。回答者の平均年齢は19.37歳($SD = .994$, 18~23歳)であった。

質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に加え、①友だちとのつきあい方尺度、②親密さリスク知覚尺度、③親友の同定、④対同性親友自己開示尺度から構成されている。なお、本研究の分析では、①については省略した。

1. 親密さリスク知覚尺度

ここでは、対人関係の親密化を抑制させる個人的傾性を測定するために、Pilkington & Richardson (1988) が作成した「親密さにおけるリスク知覚尺度」を用いた。Pilkington & Richardson は、親密さと結びついたリスク知覚における個人差を測るために、最初31項目から成る尺度を予備的に作成し、最終的に10項目を選抜した。本研究では、この10項目を和訳し、親密さリスク知覚尺度とした (Table 1-a 参照)。

6ヵ月間の「同性の友だち」とのつきあいの様子を思い浮かべさせ、10項目それぞれがどのくらいあてはまるかを4点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」、「3. どちらかといえばあてはまる」、「2. どちらかといえばあてはまらない」、「1. ほとんどあてはまらない」)。なお、評定順の効果を相殺するために、項目順が異なる2種類の評定用紙を作成した。

2. 親友の同定

次に述べる対同性親友自己開示尺度のために、自己開示対象を次のようにして同定させた。回答者に同性の友だちのうちで「最も親しい人」を一人思い浮かべてもらい、その人のイニシャルを記入させた。その人を「友だち」として意識し始めた時期を月単位で回答させた。

3. 対同性親友自己開示尺度

同性の「最も親しい友だち」に対して回答者が日ごろどのような開示を行っているかを測定するために、多川・小川・斎藤(2006)による日常的コミュニケーションにおけるテーマ重要性判断に関する研究を参照した。多川らは、日常生活の中で話題となるかもしれないテーマ

マを126項目設定し、それぞれのテーマ自体の重要性を男女大学生に判断させた。因子分析（主因子法、プロマックス回転）によって11因子が抽出され（学業、恋愛、余暇、世俗、悩み、社会、回避、運動、家庭、金銭、趣味）、「学業」、「恋愛」、「家庭」や、「金銭」のテーマ領域の重要性が高く、「世俗」や「回避」の領域の重要性が低く評定されていることが認められた。本研究では、各因子への負荷が高かった73項目を利用した。ただし、特定の人物への自己開示の程度を測定するために、表現を修正した（Table 1-b, Appendix 1 参照）。

イニシャルを記した「同性の友だち」との間の1ヵ月間の様子を思い浮かべさせ、73項目それぞれの事柄を回答者自身がその「最も親しい同性の友だち」に話していた程度を回答させた（「4. かなり詳しく話す」、「3. どちらかといえば話す」、「2. どちらかといえば話さない」、「1. まったく話さない」）。なお、評定順の効果を相殺するために、評定用紙を頁単位（8頁）でランダムに並び替えた。

Ⅲ. 結果

尺度の検討

まず、本研究で用いた尺度の項目水準での検討を行い、項目平均値の偏り（ $1.5 < m < 3.5$ ）と標準偏差値（ $SD > .60$ ）のチェックをし、不適切な項目を除去した。次に、残りの項目を対象としそれぞれ分析を実施した。

1. 親密さリスク知覚尺度

項目水準での検討では10項目すべて適切であった。Pilkington & Richardson (1988) は、この尺度を単一次

元尺度として扱った。本研究では10項目を対象に主成分分析によって単一次元性の検討を行った。この結果をTable 1-aに示す。第I主成分の説明率も十分に高く、第I主成分負荷量を見ても全項目が負荷量.400を上回っていた。したがって、回帰法によって主成分得点を算出し、親密さリスク知覚主成分得点とした。

なお、この得点について最も親しい親友をあげた者（ $N = 316, m = -.009, SD = .994$ ）とあげなかった者（ $N = 14, m = .210, SD = 1.151$ ）を比較したが、有意差はなかった（ $t_{(328)} = .80, ns.$ ）。

2. 対同性親友自己開示尺度

(1) 1次主成分分析

項目水準で見ると、 $se_fr_e_1$ と $se_fr_e_4$ が「平均値 ≈ 3.5 」、 $se_fr_e_10$ が「 ≈ 1.5 」、 $se_fr_e_8$ と $se_fr_f_1$ が「 < 1.5 」（ $p < .05$ ）であった。これら5項目を除く68項目を対象に主成分分析を実施した。2~16主成分解が可能であったが、抽出主成分が解釈可能で同一主成分への負荷が比較的明確であった11主成分解を採用した。次の①と②の基準を充たすまで分析を反復した。①特定主成分への負荷量が十分に大きい（ $\geq |.400|$ ）、②他主成分への負荷が小さい（ $< |.400|$ ）。つまり、各項目が単一の主成分にのみ $|.400|$ 以上で負荷を示すように、項目を削除しながら、明確な主成分パターンが現れるまで分析を反復した。最終の結果をTable 1-bに表す（残余項目はAppendix 1）。

負荷量が高い項目の内容の共通性に基づき、次のように各主成分を命名した。「恋愛関係」、「学業」、「家庭環境」、「社会問題」、「対人上の問題」、「余暇」、「芸能」、「嗜好」、「スポーツ」、「金銭収入」、「生き方」。大まかに、テーマ自体の重要性を判断させた多川ら（2006）の

Table 1-a 親密さリスク知覚尺度に関する主成分分析の結果：未回転第I主成分負荷量

		主成分負荷量(a)
ris_a_6	私は、だれかと親密になることを避けがちである。	.809
ris_a_3	私は、自分が傷つくかもしれないので、誰かと本当に親しくするのが怖い。	.769
ris_b_3	人と親しくすることは、厄介な事柄である。	.756
ris_a_5	私は、人を信頼することができない。	.755
ris_a_1	人と本当に親しくすることは、危険である。	.725
ris_b_2	私は、自分のプライベートな事柄を人と共有することにはためらいがある。	.706
ris_b_1	だれかと親密になると、私は落ち着かなくなる。	.634
ris_a_2	私の場合、人が私にあまりなれなれしくしない方がよい。	.574
ris_b_4	人間関係の中で最も大事な事柄は、私が傷つくかどうかである。	.527
ris_a_4	私の場合、親友になることができるのは、一度にせいぜい一人か二人である。	.503

$N = 330$

初期主成分固有値 > 4.675 ；初期説明率46.75%

(a) 主成分分析における未回転第I主成分負荷量

同性親友に対する自己開示におよぼす交際期間の長さの影響

Table 1-b 対同性親友自己開示尺度に関する主成分分析（プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果：回転後の負荷量

		当該主成分負荷量					当該主成分負荷量					
〔I. 恋愛関係〕							〔V. 対人上の問題〕					
se_fr_a_8	恋人に対する不満	.886					se_fr_e_3	同性の友だちに関する悩み	.779			
se_fr_a_7	恋人の性格	.876					se_fr_f_5	大学の友だちとのもめごと	.726			
se_fr_c_1	恋人の浮気	.804					se_fr_h_5	同性の友だちの性格	.633			
se_fr_c_3	結婚前の性行動	.752					se_fr_d_8	クラブ・サークルでのもめごと	.574			
se_fr_a_6	異性の友だちとしている遊び	.740					se_fr_d_6	現在抱えている不安	.439			
se_fr_b_5	自分の性経験	.728					〔VI. 余暇〕					
se_fr_a_5	関心ある異性についてのうわさ	.633					se_fr_a_10	暇なときにすること	.853			
se_fr_d_5	異性を好きになった経験	.507					se_fr_a_9	家での過ごし方	.826			
se_fr_b_6	異性の友だちがもつ魅力	.499					se_fr_g_4	休日の過ごし方	.685			
se_fr_g_8	恋愛に関する悩み	.465					〔VII. 芸能〕					
〔II. 学業〕							se_fr_b_7	芸能界に関するうわさ	.786			
se_fr_a_1	大学の授業	.884					se_fr_e_5	芸能人の好み	.770			
se_fr_c_2	大学のテスト	.728					se_fr_d_2	テレビ番組の好み	.733			
se_fr_b_10	授業の課題	.715					se_fr_f_4	音楽の好み	.521			
se_fr_d_7	大学の先生	.640					〔VIII. 嗜好〕					
se_fr_a_2	自分が専攻している学問	.633					se_fr_c_5	飲み物の好み	.733			
se_fr_c_4	勉強の目標	.537					se_fr_c_7	食べ物の好み	.694			
se_fr_d_3	自分の大学の評価	.521					se_fr_c_6	血液型	.688			
se_fr_f_6	自分の大学	.518					〔IX. スポーツ〕					
〔III. 家庭環境〕							se_fr_h_3	スポーツの好み	.840			
se_fr_f_7	自分の家庭関係	.834					se_fr_f_2	スポーツの経験	.796			
se_fr_f_8	親子関係のあり方	.747					se_fr_d_9	自分の運動能力	.528			
se_fr_h_4	家庭内での出来事	.736					〔X. 金銭収入〕					
se_fr_f_9	自分の育った環境	.651					se_fr_h_7	自分の収入	.719			
se_fr_e_9	同性の友だちの家庭環境	.545					se_fr_h_8	自分の貯金額	.644			
se_fr_d_4	親の職業	.531					se_fr_d_10	アルバイトに関する情報	.492			
〔IV. 社会問題〕							〔XI. 生き方〕					
se_fr_h_1	教育問題	.758					se_fr_b_2	自分の思想や主義	.687			
se_fr_g_5	現在の社会に対する不満	.751					se_fr_a_4	今後の進路	.555			
se_fr_b_8	今後の政治	.731					se_fr_a_3	自分の教養	.545			
se_fr_e_6	性差別問題	.719										
se_fr_h_2	最近の大きな事件	.557										
se_fr_g_7	公共交通機関の料金	.407										
		II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	
〔主成分間相関〕		I	.068	.230	.075	.350	.078	.171	.209	.193	.264	.261
		II		.307	.330	.199	.250	.193	.349	.343	.127	.112
		III			.327	.284	.253	.245	.332	.372	.245	.223
		IV				.050	.122	.000	.303	.195	.083	.056
		V					.343	.280	.092	.289	.254	.325
		VI						.245	.235	.291	.115	.154
		VII							.167	.288	.298	.219
		VIII								.274	.120	-.095
		IX									.193	.184
		X										.220

N = 316

初期主成分固有値 > 1.112 初期説明率 61.99%

研究と類似した主成分が得られた。ただし、「芸能」と「嗜好」は多川らの「世俗」因子が分離しており、「生き方」は多川らの「学業」から別れていた。多川らの「回避」因子と「趣味」因子はもともと曖昧な内容であるが、本研究では対応した主成分は現れなかった。なお、回帰法によって主成分得点を算出した。

(2) 2次主成分分析

対同性親友自己開示の高次構造を探索するために、1次主成分分析で算出された主成分得点を対象とした2次主成分分析（プロマックス回転（ $k=3$ ））を試みた。この水準の分析では、主成分固有値 ≥ 1.000 を基準とした。3主成分解が現れ、この結果を Table 1-c に示す。

第I主成分は、自分自身と社会との関わりに関する1

Table 1-c 対同性親友自己開示に関する 2 次主成分分析 (プロマックス回転 ($k=3$)) の結果: 回転後の負荷量

	I	II	III
〔公共的話題〕			
社会問題	.781	.038	-.195
嗜好	.730	-.048	.062
学業	.570	-.122	.348
家庭環境	.519	.296	.172
〔個人的話題〕			
恋愛関係	.144	.787	-.189
金銭収入	.073	.619	.029
生き方	-.197	.594	.221
〔周辺的话题〕			
余暇	.076	-.181	.798
芸能	-.074	.216	.583
対人上の問題	-.087	.444	.488
スポーツ	.326	.091	.484
〔主成分間相関〕			
	I	.157	.241
	II		.290

N = 316

初期主成分固有値 > 1.005; 初期説明率 51.67%

次主成分得点の負荷が高いので『公共的話題』と命名した。第 II 主成分で負荷が高い 1 次主成分得点は、自分自身に関する話題や狭義の対人関係に関するものから構成されている。したがって、この主成分を『個人的話題』と名づけた。趣味などの表層的な話題に関する 1 次主成分得点の負荷が高い第 III 主成分は、『周辺的话题』とした。回帰法によって 2 次主成分得点を求めた。なお、「対人上の問題」は、第 II 主成分と第 III 主成分の両方に高い負荷を見せたが、内面に抱える対人の悩みと日常的友人関係の出来事の側面が反映されていると考えられる。

交際期間に基づく回答者の選別

ここでは、回答者がイニシャルを記した同性の「最も親しい人」を「友だち」として意識してからの回答時点までの期間を交際期間 (月数) と定義した。頻度分布に基づき、交際期間の長さに応じて回答者を 3 分割した。

この結果を Table 2 に示す。

交際期間の長さが対同性親友自己開示におよぼす影響

交際期間の長さが同性親友に対する自己開示の程度にどのような影響を与えるかを検討するために、一元配置分散分析を実施した。従属変数は各主成分得点、独立変数は交際期間 (3 群) とした。結果を Table 3 に示す。なお、親密さリスク知覚主成分得点に対しても一元配置分散分析を試みたが、有意な結果は現れなかった。

1 次主成分得点については、次の傾向が認められた。
 ①「恋愛関係」、「家庭環境」、「対人上の話題」、「生き方」では交際中期での自己開示の活性化が起きている、
 ②「余暇」では交際期間がかなり長くなったときに自己開示が高まる。①は仮説 I と一致しているが、②については「余暇」が内面的話題とは見なせないもので、仮説 I を支持しているとはいえない。次に、2 次主成分得点を見ると、仮説 I と一致して、『個人的話題』でのみ有意な傾向があり、交際中期での自己開示の高まりが見いだされた。

なお、後述する相関分析で親密さリスク知覚と自己開示傾向との有意な負の関係が認められたので、親密さリスク知覚主成分得点を共変量とする共分散分析も行った。結果を Table 3 に追加した。「恋愛関係」と「家庭環境」で交際期間の効果が有意に達せず傾向性になったが、他では有意な水準にあった。

親密さリスク知覚と対同性親友自己開示との関係

日常の対人関係での親密さにリスクを知覚する個人的傾向が特定の同性親友に対する自己開示に抑制的働きをするかを確かめるために、ピアソン相関分析を行った。結果を Table 4 に示す。

1. 全体分析

1 次主成分では、「恋愛関係」、「家庭環境」、「対人上の話題」、「芸能」、「スポーツ」、「金銭収入」、「生き方」で、有意な負の相関が得られた。また、2 次主成分でも『個人的話題』と『周辺的话题』で有意な負の相関が見

Table 2 選択した親友との交際月数と交際期間群の選別

	全体 (N=316)	短期 (N=114)	中期 (N=91)	長期 (N=111)	一元配置分散分析
		1-24 ヶ月	25-54 ヶ月	60-206 ヶ月	
平均値	50.90	13.31 a	40.19 b	98.28 c	F = 407.68 p = .001
標準偏差	42.99	7.41	7.65	36.93	

*: 異なる英小文字は 5% 水準で有意に異なることを示す (最小有意差法)。

Table 3 親密さリスク知覚および対同性親友自己開示に関する交際期間別比較：一元配置分散分析および共分散分析の結果

		平均値	標準偏差	一元配置分散分析	共分散分析 (a)
親密さ リスク知覚	短期	0.062	1.025	$F = 0.60$	
	中期	-0.090	0.977		
	長期	-0.016	0.978		
〔1 次主成分〕					
恋愛関係	短期	-0.155 <i>a</i>	0.959	$F = 3.24$	$F = 2.85$
	中期	0.200 <i>b</i>	0.946	$p = .041$	$p = .060$
	長期	-0.004 <i>ab</i>	1.063		
学業	短期	0.102	0.980	$F = 1.30$	$F = 1.32$
	中期	0.009	0.808		
	長期	-0.112	1.149		
家庭環境	短期	-0.184 <i>a</i>	0.973	$F = 3.39$	$F = 3.01$
	中期	0.166 <i>b</i>	0.940	$p = .035$	$p = .051$
	長期	0.053 <i>ab</i>	1.052		
社会問題	短期	-0.081	0.972	$F = 0.59$	$F = 0.62$
	中期	0.037	0.981		
	長期	0.053	1.047		
対人上の 問題	短期	-0.227 <i>a</i>	1.017	$F = 4.72$	$F = 4.30$
	中期	0.142 <i>b</i>	0.979	$p = .010$	$p = .014$
	長期	0.117 <i>b</i>	0.966		
余暇	短期	-0.125 <i>a</i>	1.025	$F = 3.77$	$F = 3.75$
	中期	-0.097 <i>a</i>	0.912	$p = .024$	$p = .024$
	長期	0.208 <i>b</i>	1.018		
芸能	短期	-0.066	0.900	$F = 0.40$	$F = 0.31$
	中期	0.023	1.122		
	長期	0.048	0.997		
嗜好	短期	0.016	0.932	$F = 0.76$	$F = 0.75$
	中期	-0.103	1.139		
	長期	0.069	0.947		
スポーツ	短期	-0.092	0.959	$F = 0.76$	$F = 0.57$
	中期	0.052	0.973		
	長期	0.052	1.064		
金銭収入	短期	0.026	1.054	$F = 0.07$	$F = 0.13$
	中期	-0.004	0.936		
	長期	-0.024	1.002		
生き方	短期	-0.224 <i>a</i>	1.025	$F = 4.62$	$F = 4.31$
	中期	0.152 <i>b</i>	0.937	$p = .011$	$p = .014$
	長期	0.105 <i>b</i>	0.992		
〔2 次主成分〕					
公共的 話題	短期	-0.016	0.972	$F = 0.02$	$F = .02$
	中期	0.012	1.027		
	長期	0.006	1.015		
個人的 話題	短期	-0.215 <i>a</i>	1.048	$F = 5.13$	$F = 4.56$
	中期	0.224 <i>b</i>	0.914	$p = .006$	$p = .011$
	長期	0.038 <i>ab</i>	0.981		
周辺の 話題	短期	-0.137	1.026	$F = 2.27$	$F = 2.14$
	中期	-0.007	0.966		
	長期	0.146	0.989		

短期 $N = 114$ ；中期 $N = 91$ ；長期 $N = 111$

*：異なる英小文字は5%水準で有意に異なることを示す（最小有意差法）。

(a) 共変量：親密さリスク知覚主成分得点

Table 4 親密さリスク知覚と対同性親友自己開示の関係ーピアソン相関係数ー

	全体 ($N = 316$)	短期 ($N = 114$)	中期 ($N = 91$)	長期 ($N = 111$)
〈1 次主成分〉				
恋愛関係	-0.178 $p = .002$	-0.170 $p = .070$	-0.293 $p = .005$	-.084
学業	-.032	-.059	-.184 $p = .080$.072
家庭環境	-0.171 $p = .002$	-0.270 $p = .004$	-0.255 $p = .015$.006
社会問題	.025	.111	-.172	.099
対人上の問題	-0.191 $p = .001$	-0.257 $p = .006$	-0.322 $p = .002$.013
余暇	-.085	-.087	-.130	-.048
芸能	-0.157 $p = .005$	-0.165 $p = .080$	-0.227 $p = .031$	-.082
嗜好	.017	-.041	-.009	.096
スポーツ	-0.188 $p = .001$	-0.297 $p = .001$	-.171	-.086
金銭収入	-0.152 $p = .007$	-0.209 $p = .026$	-.106	-.126
生き方	-0.119 $p = .035$	-.103	-0.180 $p = .088$	-.067
〈2 次主成分〉				
公共的 話題	-.033	-.061	-.149	.094
個人的 話題	-0.243 $p = .001$	-0.265 $p = .004$	-0.349 $p = .001$	-.117
周辺の 話題	-0.184 $p = .001$	-0.242 $p = .009$	-0.247 $p = .018$	-.062

られた。これらの結果は、仮説Ⅱ-aが限定されることを示しているが、仮説Ⅱ-bのように必ずしも内面的内容だけに親密さリスク知覚の効果が現れるわけではないことも表している。

2. 交際期間別分析

交際期間別に相関分析の結果を見ると、仮説Ⅱ-cと一致して長期群ではいずれの主成分でも有意な相関が認められなかった。

1次主成分については有意な負の相関が次のように得られた。「家庭環境」と「対人上の問題」で短期群と中期群、「スポーツ」と「金銭収入」で短期群のみ、「恋愛関係」と「芸能」で中期群のみ。また、2次主成分の場合には、『個人的話題』と『周辺的话题』で短期群と中期群で有意な負の相関が認められた。

IV. 考察

本研究の目的は、最も親しい友だちに対する自己開示

にその友だちとの交際期間がおよぼす影響を検討することであった。さらに、親密化の進展 (Levinger, 1974) を抑制する親密さリスク知覚 (Pilkington & Richardson, 1988) の働きも調べた。このために、仮説を設定し (仮説 I, II-a, -b, -c), 女子大学生を対象とする質問紙調査を行った。

仮説 I についてはおおむね支持され、友だちの交際期間が長いほど内面的開示が営まれていた。ただし、「余暇」も交際期間の影響が見られた。本研究での「余暇」で高い負荷を示している項目は、休日などの過ごし方から成る。話題自体は表面的であるけれども、交際期間が長くなるとその友だちと余暇を共にする機会も増加すると考えれば、「余暇」に関する自己開示が活発化するのは当然であろう。

親密さリスク知覚の自己開示抑制効果に関する仮説 II-a や II-b については部分的に支持された。つまり、「芸能」や「スポーツ」などの『周辺的话题』でも抑制効果が現れた。この 2 種類的话题は趣味に関するものであるが、互いの趣味の開示は一致すれば親密化の促進剤となる。しかし、もしも不一致であれば交友の進展を阻害する可能性がある。話題自体は内面的ではないけれども、親密さに伴うリスクを抱きやすい者は不一致が顕在化することを懸念するため、このような結果となったと考えられる。

仮説 II-c では交際が長期化している場合には親密さリスク知覚の自己開示抑制機能が消失すると予想した。結果を見ると、この仮説と一致して長期群ではいずれの場合も有意な関係がなかった。

ところで、Pilkington & Richardson (1988) が提起した親密さリスク知覚は、Bellak (1970) の「山アラシのジレンマ」状況をもたらす。しかしながら、興味深いことに、二者の親密化を抑制するこの個人的傾性は、「最も親しい友だち」をもたないことにはならない。「友だち」をあげた者とあげなかった者との間に親密さリスク知覚に有意差は認められず、さらに、「友だち」との交際が長続きしている者が親密さリスク知覚をあまり抱かない傾向は認められなかった。つまり、親密さリスク知覚がつきあい自体を阻害する証拠は得られなかった。この親密さリスク知覚については、自己開示に対する抑制傾向を捉える他の測度 (片山, 1996; 藤井, 2001; 松島, 2004 など) と関連づけながら今後も検討する必要がある。

本研究では、女子大学生を対象に友だちに対する自己開示の様相を交際期間や親密さリスク知覚と関連させて

検討した。しかしながら、次のような方法上の限界を指摘できる。①同定された「友だち」に対する親密さ感情を測定していない、②「友だち」がどの程度の親密さリスク知覚を抱き、どのような自己開示をしているかも捉えていない。①については、Levinger (1974) の親密化進展モデルは必ずしも本研究で中心とした交際期間と比例するわけではないからである。②はそもそも親密化が相互的自己開示の反復によることを前提にすれば、相手の反応も関係進展に重要となるからである。たとえば、柴橋 (2004) は、他者にどのような開示をしたいかだけでなく、当該他者がどのような開示を望まないかも重要であることを示した。また、森脇 (2005) は被開示者の反応 (受容的反応と拒絶的反応) を取りあげた。以上のような問題点を踏まえながら、今回は対象としなかった男性も対象にしながら二者関係の親密化と自己開示の関連を今後も実証的に検討する必要がある。

〈付記〉

- (1) 本研究で分析対象としたデータは、諸井克英の下で卒業研究のために、植木美枝 (同志社女子大学・現代社会学部社会システム学科 2007 年度卒業) が立案・収集し、岩佐直美 (同志社女子大学・生活科学部人間生活学科 2008 年度卒業) が継続して追加収集した。本研究では、この卒業研究データを再分析した。
- (2) データの統計的解析にあたって、PASW Statistics 18.0 for Windows を利用した。
- (3) E-Mail: kmoroi@dwc.doshisha.ac.jp

V. 引用文献

- Bellak, L. 1970 *The porcupine dilemma: Reflections on the human condition*. New York: Citadel press. 小此木啓吾訳『山アラシのジレンマ—人間の過疎をどう生きるか—』1974 ダイヤモンド社
- Derlega, V. J., Metts, S., Petronio, S., and Margulis, S. T. 1993 *Self-disclosure*. Sage Publications, Inc. 齊藤勇監訳『人が心を開くとき・閉ざすとき—自己開示の心理学—』1999 金子書房
- 榎本博明 1997『自己開示の心理学的研究』北大路書房
- 藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
- Jourard, S. M. 1971 *The transparent self*. Litton Educational Publishing, Inc. 岡堂哲雄訳『透明なる自己』1974 誠信書房

- 片山美由紀 1996 否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連 心理学研究, **67**, 351-358.
- Levinger, G. 1974 A three-level approach to attraction : Toward an understanding of pair relatedness. T. L. Huston (Ed.) *Foundations of interpersonal attraction*. New York : Academic Press. Pp.99-120.
- 松島るみ 2004 『青年期における自己開示を規定する要因』 風間書房
- 森脇愛子 2005 『抑うつと自己開示の臨床心理学』 風間書房
- Pilkington, C. J., & Richardson, D. R. 1988 Perceptions of risk in intimacy. *Journal of Social and Personal Relationships*, **5**, 503-508.
- 柴橋祐子 2004 『青年期の自己表明に関する研究－中学・高校生の友人関係を対象として－』 風間書房
- 多川則子・小川一美・斎藤和志 2006 日常的コミュニケーションにおける話題の収集を目指して－テーマの重要性判断に基づく検討－ 対人社会心理学研究 (大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学講座), **6**, 71-79.

Appendix 1 対同性親友自己開示尺度における残余項目

se_fr_b_1	異性の友だちがもっている趣味
se_fr_b_3	勉強に対する満足感
se_fr_b_4	授業後の予定
se_fr_b_9	通学にかかる交通費
se_fr_d_1	占いや運勢
se_fr_e_1	異性の好み
se_fr_e_2	これまでの進路選択
se_fr_e_4	遊びの計画
se_fr_e_7	家の近所での出来事
se_fr_e_8	宗教活動の経験
se_fr_e_10	最近の性風俗産業
se_fr_f_1	支持する政党
se_fr_f_3	自分の部屋
se_fr_g_1	自分の短所
se_fr_g_2	異性の友だちに関するうわさ
se_fr_g_3	異性の友だちの性格
se_fr_g_6	同性の友だちがもっている趣味
se_fr_g_9	若者の性の乱れ
se_fr_h_6	自分の出身地

(2010年11月30日受理)